

「自然学」はいかにして提唱されたのか ～今西錦司の学問について

斎藤清明

人間文化研究機構・総合地球環境学研究所

「自然学」は今西錦司が晩年に提唱したものである。自らの長年の学問を総括した命名であった。今西は京都の商家に生まれ、昆虫少年として育ち、学生登山家として活躍した。研究者になっても、なによりも自然をわが目で知ろうとつとめ、そこから「すみわけ」を発見し、「種社会」論をかんがえた。フィールドワーカーであると同時に理論家であった。昆虫学、生態学、生物社会学、霊長類学、人類学、進化論へと展開した「今西学」を、自ら「自然学」と名付け、自然についての学問の総合化をはかろうとした。

はじめに

この稿は、「高所プロジェクト」の一環として「自然学」を展開させていくため、「自然学」を提唱した今西錦司（1902-92）について論じるものであるが、拙稿「今西錦司とフィールド科学」（注1）をもとにしていることを、最初にことわっておく。その稿では今西のフィールド科学への歩みをたどり、大興安嶺探検など戦前・戦中の「帝国」日本との関係に触れたのだが、この稿では戦後から晩年の「自然学」に焦点をあてる。

まず、今西錦司の学問を概観しておこう。今西は、フィールドでの研究をもとに、昆虫学に始まり、生物学から生態学、動物社会学、霊長類学、人類学へと展開し、晩年にいたって自らの学問を「自然学」と総括した（注2）。

今西は「すみわけ」論や独自の進化論などの理論でも知られるが、なによりもフィールド・ワーカーであった。若き日の鴨川での水生昆虫カゲロウ、北アルプスでの万年雪や森林の調査に始まり、戦前・戦中には朝鮮、北太平洋や中国大陸での学術探検、戦後は九州での半野生馬やニホンザルの調査からヒマラヤやカラコルムの踏破、さらにアフリカへと、フィールドワークを積極的に展開した。

このように今西は、フィールド科学のパイオニアであった。フィールドワークに基づいたオリジナルな研究に徹し、その学風は後進に大きな影響を与え、継承されている。

1 山岳学

今西は京都の西陣に生まれ育った。少年時代から昆虫採集が好きで、自然に親しんだ。中学校で西堀栄三郎（後に第一次南極越冬隊長）ら山仲間と出会い、京都の北山に山登りとして初めてわけ入り、そのパイオニアとなる。京都府内の高山のピーク・ハンティングを中学生でなし遂げ、第三高等学校に入ると山岳部を創設。ピッケル・アイゼン・ザイルによる近代的な登山やスキーに熱中する。京都帝大生時代にかけては学生アルピニストとして、慶応や早稲田の山岳部など先発組に負けじと初登山に挑んだ。剣岳チンネ初登攀など日本登山史に記される先鋭的な登山家であった。

京都帝大に進む際、当初に志望した理学部（動物学科）ではなくて農学部（農林生物学科）を選んだのは、理学部は夏休みに臨海実習があるためだった。今西はその夏、剣岳源治郎尾根の初登攀を仲間とねらっており、夏休みの実習がない農学部に進んだおかげで首尾よく成功する。大学生最後の夏休み、剣岳での20日間の夏山合宿を終えると、黒部川を源流まで歩き、さらに上高地から蒲田川や金木戸川へ越えた。この、長い沢歩きのなかで、水生昆虫を採集。その資料をもとに、「日本北アルプスの二、三溪流における水溪昆虫について」を卒論とする。

大学院では水生昆虫を研究テーマとし、農学部（昆虫学教室）から理学部（動物学教室）に移る。わが国の淡水生物研究のパイオニア川村多実二理学部教授のもとで、今西はおもに理学部附属大津

臨湖実験所でカゲロウ類の研究を続けた。1933年に講師（無給、常勤）嘱託となり、カゲロウ類の分類や生態研究をすすめるなかで、やがてカゲロウ幼虫で「すみわけ」を発見する。

今西は「日本溪流産カゲロウ類」で1939年12月、京都帝国大学から理学博士を授与される。10年来のカゲロウ研究の集大成であるが、10部構成の論文のうち、8部までは分類研究である。「すみわけ」を論じたのは最後の論文においてであった。「ライフゾーン配置から示される生態的構造」と題していた。今西が理学博士になったとき新聞は「登山家が博士に」と報じたことを、梅棹忠夫が覚えている（注3）。「今西氏が博士に」という新聞もあり、なにか意外なことに受け取られたという。今西は生物学者であるより前に、登山家として知られていた。

このカゲロウについての最初の研究報告は1930年の「Mayflies from Japanese Torrents. I」（注4）であるが、その前年に「剣沢の万年雪に就いて」を理学部地質学教室の関係者が編集する学術誌『地球』に発表している（注5）。その内容は、秋になっても万年雪が剣沢に存在することを1928年秋に現地で見つけ、1925年から3年間の夏の観察データとともに、氷河との関連で論じたものである。この今西の最初の学術論文は、専攻する生物学に関するものではなく、自らの登山活動の中で調査した雪氷に関するものであった。ここにも、今西のフィールド科学への強い志向が現れている。

さらに、「雪崩の見方に就いて」（1931年）や「日本アルプスの雪線に就いて」「風成雪とその雪崩に関する考察」（ともに1933年）、「日本北アルプスの森林限界について」（1935年）、「垂直分布帯の別ち方に就いて」（1937年）を、日本山岳会の『山岳』に次々に発表していった。これらは約40年後に『日本山岳研究』に収められるのだが、今西は往時をしのいで自序に記している。「私はそのころ、山岳に傾倒していた」「私にとっては、山に登り、山岳を研究することそれ自身が、自分の仕事であってほしかったのである」（注6）

若き日に、今西は「山岳学」というべきものを構想していたのである。まとまった自然そのものとしての山岳研究を。だが、ついに成らなかつた。晩年にいたって「自然学」を提唱するのは、その「山岳学」への想いがあったからであろう。

2 探検学

今西は京大を卒業した3年後の1931年、ヒマラヤ登山をめざし、同期の西堀、高橋健治、桑原武夫らに若手を加えて、京都学士山岳会（AACK）を結成する。すぐに翌年のカブルー（7338m）遠征計画を立て、冬の富士山で極地法によるヒマラヤ登山の訓練を行った。しかし、満州事変のためにヒマラヤ行きは挫折した。

1934年末から翌年にかけて「京都帝国大学白頭山遠征隊」を率いて朝鮮の最高峰、白頭山に冬季初登頂する。学術調査とともに、ヒマラヤ登山装備や無線のテストなども行い、再びヒマラヤへ歩を進める。世界第二の高峰のK2（8611m）を1937年にめざすヒマラヤ計画を立て、偵察隊員をインドへ派遣する。しかし、許可が出なかつた。しかも、同年には盧溝橋事件がおき、日中戦争が始まっていた。とても実現できる時勢ではなくなっていた。

今西は遠征登山から学術探検に転進する。京都学士山岳会にかわって、研究者を主体にした京都探検地理学会を組織。探検の計画をいくつか立てた末、1941年、学生を連れて北太平洋のポナペ島調査を行った。

この京都探検地理学会の最初で最後となった調査隊の構成は、隊長に今西、隊員は森下、中尾佐助（農学部学生）、吉良（同）、川喜田（文学部学生）、梅棹（理学部学生）＝以上はポナペ島に滞在＝ほか四名であった。日本の委任統治領であったミクロネシアのポナペ島に向けて7月14日に横浜港を出帆。パラオ、トラック、ポナペ、ヤルートを歴訪した。隊員のうち浅井辰郎（満州国建国大学）と京都帝大法学部学生三名はそのまま帰国し、隊長の今西ほか森下ら5名はポナペ島で調査活動を行った。そして、10月8日に横浜に帰着した。太平洋戦争直前という緊張した時期で、横浜を出帆した直後に学生の海外旅行禁止令が出て、ポナペ島滞在中には大学生の卒業期3カ月繰り上げが発表された。

この3カ月間は、ポナペ島の自然（とくに森林を中心に生物）と「暮らし」を生態学的に調査した。梅棹が「わたしはここで生態学におけるフィールド・ワークのありかたをみっちりたたきこまれた」（注7）と記すように、今西から学術探検家としての実地訓練を受けた。報告書は1944年、

今西錦司編著『ポナベ島—生態学的研究』（彰考書院）として出るが、その執筆でも今西はきびしく指導した。吉良は1957年、同書の復刻（講談社）の際に「解説—復刻版へのあとがき」で、もとの原稿がかたちをとどめないほど朱を入れられた思い出を記している（注8）。

太平洋戦争開戦から半年後の1942年5月から7月にかけて、京都帝国大学講師、理学博士の今西が隊長をつとめる「大興安嶺探検隊」は、中国東北地方（当時の満州国）の北部大興安嶺の縦断に成功した。戦局の転換点となったミッドウェー海戦は、この探検の最中のことだった。

タイガと呼ばれる樹海が広がる森林地帯の中を、地図の緯度にして3度半、約1000キロの行程だった。本隊は今西隊長ら9名、地図の空白地帯に挑む支隊は川喜田二郎支隊長ら4名、補給にあたる漠河隊は森下正明副隊長ら8名で構成されていた。南からの今西たち本隊は、ロシア人のコサック馬を輸送にもちいて北上し、支隊も同行。北からは森下たちの漠河隊がトナカイを率いて南下した。両隊は天測で位置を確かめながら、無線交信で連絡をとりつつ距離を縮めていった。支隊は途中で本隊と分かれ、ビストラ河源流の北部大興安嶺分水界の地図の白色地帯を突破。やがて、3隊はあらかじめ決めておいた地点で合流する。そして、全隊員が漠河隊のルートを戻り、アムール川の漠河に至って、探検を終えた。

地図の空白地帯を突破しようと、今西たち大興安嶺探検隊は計画し、みごとに成功したのである。しかも、北部大興安嶺の地域は無人に近い原野にツングース系の狩猟民族オロチョンがわずかにいるだけで、満州国の軍隊にとってはいわば守るべき範囲の外にあった。探検隊を成立させて出発するまでは軍の了解と援助がないとできないが、大興安嶺に入ってしまうと、そこはもう探検の「自由の天地」だった（注9）。

この大興安嶺探検隊の主力が学生であったことは注目に値する。隊長の今西錦司、副隊長の森下正明（京大農学部副手）を除く19名のうち、10名までもが学生だった。他は、軍の無線技師と測量隊、満州国政府の医官、満州航空社員、警察隊で、満州国で加わった隊員であった。学生は京都から隊の中心になって活動してきたメンバーで、吉良龍夫（京大農学部）、梅棹忠夫（京大理学部）、藤

田和夫（同）、伴豊（京大文学部）、川喜田二郎（同）、土倉九三（京都高等蚕糸学校）、江原真之（同）、加藤醇三（同）、小川武（大阪商科大）、川添宣行（立命館大）である。やがて、吉良（植物生態学）や川喜田（文化人類学）、梅棹（民族学）、藤田（地質学）らは戦後、すぐれたフィールド科学者になっている。

1944年4月、今西は当時の蒙古聯合自治政府の首都、張家口に設立された西北研究所の所長に就任する。日本の敗戦まで1年4ヶ月間、その任にあった。西北とは西北中国を意味していることはいうまでもない。その西北研究所は、日本の傀儡政権である同政府の財団法人蒙古善隣協会に所属していた。そして、同協会そのものも日本政府の大東亜省の全額助成団体である。つまり西北研究所は「帝国」につらなる学術機関といえる。

西北研究所のスタッフは、所長の今西のほか、次長は石田英一郎（民族学）。主任は第一課（理系）と第二課（文系）にそれぞれ、森下正明と藤枝晃（東洋史）。所員や囑託として理系には中尾佐助、梅棹忠夫が、文系には磯野誠一（法社会学）・富士子夫妻、酒井行雄（心理学）、甲田和衛（社会学）らがいた。それぞれ戦後に研究者として名を成した顔ぶれである。

今西は、京都帝大旅行部の後輩で登山家として知られる加藤泰安を、協会の総務部長にと招いた。しかし前任者がいて、加藤は奥地旅行のマネージャーを務めた後、北京に引き揚げる。梅棹らの仲間の和崎洋一（京大理学部大学院）も奥地旅行に参加した後、帰国している。また、吉良龍夫にも声をかけたが、病身だったため京都で留守本部の役目をさせる。「もちろん、ゆくゆくは立派な総合研究所にするつもりやった」（注10）ので、ほかにも学生たちを囑託のかたちで呼ぶことをかんがえたという。

このように西北研究所には理系と文系の少壮、若手の研究者がつどっていた。戦争のさなか、日本内地からみれば辺境といえる蒙疆の地にできた、まだ海のものとも山のものともわからない研究所は、いわば文理融合の研究者集団であり、フィールドワークの拠点でもあった。張家口は古来からモンゴルと中国との貿易の関門である。万里の長城が両側の山から迫ってくる城門（大境門）のすぐ外側に宿舎が、城内に研究所があった。今

西は、ここを拠点に学術探検を繰り広げるつもりだった。そして、まず冬季のモンゴル高原へ奥地旅行を取行する。

寒風ふきすさぶ冬のモンゴルの調査は、それまでは夏にトラックで行うという常識を破るものだったが、梅棹は記す。「その結果は大成功であった。いままで冬のモンゴルをみた日本人はだれもないのだ。まさに前人未到のくわだてだった。そのおかげで、いままで知られていない事実がおびただしくわかった。常識に反しての意表をつく発想がこの成功をもたらしたのである」（注11）

さらに中央アジアも視野に入れていた。しかし、「帝国」日本の敗戦。わずか1年あまりで今西の研究所は消滅してしまう。それでも、今西は当時の状況のなかで、自分のやりたい道を選んだのである。そして、蒙疆・張家口の研究所は、戦後の今西たちの出発基地となったといえよう。

以上は、敗戦を西北研究所所長として迎えるまでの今西の前半生である。その後をざっとみておくと、戦後すぐ京都大学理学部講師に復帰する。ウマ、そしてニホンザルの動物社会学的な研究を開始し、1950年に京都大学人文科学研究所に講師のままで移る。ヒマラヤのマナスル登山計画を京大グループで独自で立ち上げ、戦後の日本からの海外登山の先頭に立つ。ネパールから登山許可も得るが、これはオールジャパンでと日本山岳会に委譲し、今西はその偵察隊を率いて1952年、日本人登山者として初めてヒマラヤを巡った。続いて、カラコルム・ヒンズークシ学術探検（1955年）、ゴリラ調査（1958年）にはじまるアフリカでの霊長類・人類学調査など、京大を定年になるまでフィールドワークを続ける。

3 サル学

1946年6月、今西は京都に帰ってきた。中国にいた間に書き続けた原稿を大切に持ち、天津から米軍の上陸用舟艇に乗せられて佐世保に着いた。この帰郷の際に神戸付近の戦災の跡を見て復興は容易でないと、これからのことを思った。

「この調子では、これから金のかかる実験的な仕事を始めてもとうていアメリカに勝てるはずがない。そうとすれば親譲りの身体を動かさず、あとは鉛筆とノートと望遠鏡さえあればで

きるフィールド（野外）の仕事で、太刀打ちする以外にはない。いままではよく実験室の中で白い実験服をきて顕微鏡をのぞいているのが研究で、われわれのようにきたない身なりをしてフィールドを駆けまわり、望遠鏡をのぞいているのは研究でないかのように取り扱われがちであったが、そろそろわれわれの仕事もその真価を問われるときがきたのではないか、と思ったのである」（注12）

京都帝国大学理学部講師（嘱託）はそのままにして西北研究所に赴任していたから、帰国すると大学に復帰した。動物学教室の別棟に一室を与えられたが、コンクリート床の実験室で、終日陽が差さない寒々とした部屋だった。もっぱら書きものに集中し、『生物社会の論理』（1949年）や『人間以前の社会』（1951年）などが生まれていく。

京都大学一回生の伊谷純一郎が1948年夏、今西を初めて訪ねたのは、この部屋だった。「広大な蒙古のステップとはまことに対蹠的な、蟄居というにふさわしい狭い部屋で、若かった私は、何か肅条とした印象を、この部屋とこの部屋の主から受けた」（注13）伊谷は、その秋に今西が予定の九州での調査に連れて行って下さいと頼んだ。今西は「来たければ来るがよからう」と答えた（注14）。これが、霊長類学のパイオニアとなる師弟の出会いとなった。

【自然史学会】

京都探検地理学会は戦後すぐに解散しており、今西は西北研究所で一緒だった藤枝晃や中尾に働きかけて新たに「自然史学会」を組織する。最初の例会を48年2月、藤枝がいる東方文化研究所（49年4月に京大人文科学研究所となる）でもった。会則は「毎月1回、必ず例会を開くこと」。会員は、その例会に集まった者であるとした。2年後に学会誌として『自然と文化』を刊行する際に、会長は京大農学部教授、並河功として会の組織を整えたが、当初は今西、藤枝、中尾、梅棹らで切り回していた。

それも当然で、西北研究所時代のフィールドワークはじめ、戦中の学術調査の成果を発表するために組織した学会であった。第1回例会は中尾の「ユウマイ文化圏」である。これが、中尾の栽培植物起源論や照葉樹林文化論につながっていく。

48年3月の第2回は今西が「遊牧論」を、第3回は森鹿三（東方文化研究所）が「華北の竹」をと続く。第6回に江上波夫（東大）の「遊牧の起源」、第8回に梅棹の「蒙古の乳文化」、第9回に藤枝の「酪と酒黍」、第10回に石田英一郎の「ユーラシア大陸における二つの信仰圏」と、毎月の例会が続いた。49年秋の第20回例会は自然史学会第1回大会として、毎日新聞大阪本社の講堂で開催。今西が「遊牧社会の系譜」を、東洋史の宮崎市定（京大文学部教授）が「二つの歴史観」を講演した。

今西は自然史学会がめざすものを『自然と文化』（NATURA & CULTURA）第1号（1950年5月）の「刊行のことば」でいう。

「日本の学会の弱点は、いわゆる『講座』なる制度に具現せられた学問の一つの既成の部門の周辺部、乃至はさふいふ枠のまだ設定せられない分野に現はれるものであって、とくに自然科学と人文科学の接触領域にいちぢるしい。われわれはかふいふ分野における具体的研究の促進を意図して行動するものである。これによってコムパートメントの壁をうち破り、学問を健全に発展させることをめざしてゐる」

『自然と文化』第一号には、今西の「F. E. CLEMENTS — その学説の批判」、川喜田二郎「農業林業の北限及び馴鹿飼養の南限などを画する気候的境界線について」、三木茂「鮮新世以来の本邦産遺体植物の研究」、時岡隆「深海動物の眼の問題と矢虫類」、上野実朗「牡丹と芍薬— 中国に於けるその沿革」、中尾佐助「ユウマイ文化圏— 穀類の品種群からみた東北アジアに於ける新しい一つの文化類型」、梅棹忠夫「乳をめぐるモンゴルの生態I— 序論および乳しぼりの対象となる家畜の種類について」、磯野富士子「死人の助けられた話— 『オールドス口碑集』第1部」が掲載されている。まさに、自然科学と人文科学の境界領域に挑む内容といえよう。

今西の論文は、米国の生態学者クレメンツが1945年に亡くなっていたことを最近知ったと書き出し、「この一文は、美辞麗句をつらねたCLEMENTSへの追悼文ではない。二〇年にわたる、わたくしとCLEMENTSとの取りひきの総決算を示す、勘定書の一つである」。学生時代に読み、取り組んできたサクセッション・セオリーにつ

いて、クレメンツの業績をダーウィンにも比したうえで、「学説は批判されねばならない。そして、学説はおそらく書き改められるべきときがくるであろう」と、クレメンツの単極相説を批判し、自らの多極相説を展開する（注15）。

【登山とフィールドワークを再開】

大陸から引き揚げて日本国内に閉じこめられたが、いつなるときでも海外に飛び出せる準備はしておこう。今西は帰国してまもなく、国内の5万分の1や20万分の1の地図をじっくりと見やり、これまでの登山記録も振り返ってみた。ざっと250ほどの山に登っていた。そして、さらに登ってみようと思う山は250ほどあった。「よしわたくしは一生かかって、わたくしの登った山が、五〇〇座に達することを、念願としよう」と決心。その決意をした7月16日の日付を入れ、京都一中山岳部の部報『嶺』第7号（1946年）の巻頭に載せた（注16）。登山から探検に転じていた今西に再び「山」が戻ってきたのである。この「日本五百山」は中学生時代の「山城三〇山」の続きとなる（注17）。

登山とともに、フィールドワークの場所さがしにもかかった。大陸での仕事の続きとして、動物社会学のウマの調査をしようと。1948年春、宮崎県都井岬へ、理学部の学生、川村俊蔵を伴って出かけ、御崎馬と呼ばれる放牧された半野生馬の観察を始めた。研究費は乏しく、昼食はカライモで我慢したが、「健康と知恵とに満ちた11日間」のフィールドワークだった。

伊谷によると、この最初の調査の記録には、のちの霊長類研究をも貫く指針がはっきりと示されている（注18）。まず、あくまでも比較社会学の調査だということ。比較というのは究極的には人間社会との比較を目標とすることである。第二に、この調査で初めて個体識別法が採用された。ウマに名前を付け、一頭づつの行動を記録し、整理、分析していく。社会学的なアプローチであった。第三には長期調査の必要が説かれた。個体識別から始まる仕事は、成果がでるまでに時間がかかる「長期観察」になることを覚悟する、と。

その年の秋、第二回目の調査には伊谷純一郎も加わった。その際に、サルがいるという幸島に三人で渡った。この日、1948年12月5日を、伊谷は「これがまさに私たちの霊長類学の事始めの日

だった」（注19）とする。

【ウマからサルへ】

都井岬のウマの調査は、1949年8月と50年5月、51年9月と五回続けられ、一応の完結を見る。今西は「一〇年かけるつもりではじめた」のだが、51年秋から海外に出る話がおこり始め、中絶のやむなきに至ったのである。

それでも今西は、「御崎馬の社会調査」と題する四編のオリジナルな報告を『生理生態』などに発表。また、その資料をもとにした「半野生馬の社会生活—Specia, specion, および oikia, oikion の提唱」（注20）では、生物界についての4つの概念を打ち出し、動物社会学への独自の理論的な貢献もしている。さらに、今西が編者となった『日本動物記』（全4巻、光文社）の第1巻として『都井岬のウマ』を著した。これらの論文著作のもとになったフィールドノートが自宅に残されているが、じつに詳細なものである。

さて、このウマの調査の最中に都井岬でニホンザルとの最初の遭遇や幸島への調査行があり、サル学が開始される。「ニホンザルは、日本では、人間のつぎに高等な動物である。そして、彼らが、つねに一団となって社会生活を営んでいるという点でも、また、彼らがまさに、野生の真髄といってよい存在であるという点でも、私たちの研究の対象として、まったく異存のない相手であった」（注21）

今西を中心に同志があつまり、霊長類研究グループが1951年6月にできる。動物学教室の教授、宮地伝三郎を代表者にして、間直之助、川村俊蔵、伊谷純一郎、河合雅雄、徳田喜三郎がメンバーだった。ニホンザルという名称ではなく、人間も含む霊長類という名称をこの時点で用いたところにも、その後の研究と意気込みがうかがえる。

伊谷らは各地のサルの生息地を訪ね歩き、群れに近づこうとした。しかし、警戒して逃げられるという苦労が、数年間も続く。ついに52年8月、伊谷と徳田が幸島で餌づけに成功。それをういて伊谷が高崎山で群れの社会構造を明らかにするなど、次第に成果を上げていった。

58年には今西と伊谷は最初のアフリカ調査を行い、その足で欧米の研究者を訪ねる際に「私たちは先駆者として遇せられていることを身に感じて感じた」（注22）という。サル学ともいわれる

霊長類学のめざましい展開は、まさに今西たちのフィールドワークから育ったのである。

4 自然学

【生物誌研究会】

ニホンザルの餌づけに成功した52年8月、今西はマナスル踏査隊長としてネパールに向かった。ヒマラヤをおもいたってから4半世紀、50歳にして、若き日の夢を実現させたのである。京都大山岳部の若手OBからわき上がったヒマラヤ登山計画を、学内に生物誌研究会という学術団体をつくって具体化、さらに日本山岳会に委譲することによって自らがネパールに一番乗りをする、今西ならではの実行力であった。

このヒマラヤ行は、日本山岳会が翌年3月に派遣するマナスル登山隊（注23）のために登路偵察が目的だった。ところが、今西はすぐにはマナスルに向かわず、広くネパールを歩いた。まず、探検を行ったのである。標高約6200mのチュルーという山にも初登頂する。それからマナスルの登路を発見し、所期の使命も果たす。探検と登山と、今西はともに実践した。

4ヶ月間に及ぶキャンプ生活最後の日に首都カトマンズを見下ろす尾根でキャンプした際、今西と中尾佐助は黒々とした森を目にした。常緑カシが主体の照葉樹林だった。「これはずっと東ヒマラヤに続き、中国南部から日本の南部まで続いている森林帯だ、これが東アジアの温帯の大構造だ」（注24）と、中尾にとって照葉樹林を認識する最初となった。のちに今西（引き継いで梅棹忠夫）が主催する人文科学研究所の共同研究会で、中尾が提唱する「照葉樹林文化論」の原点が、このときに形成される（注25）。

ヒマラヤ計画のために今西たちが51年秋につくった生物誌研究会（Fauna & Flora Society）は、京都探検地理学会の戦後版のようであった。名前は「生物誌」だが、生物系以外の有力教授が名をつらねていた。その中心に今西がいたのである。しかし、ヒマラヤをやるとなると、教授たちばかりでは山に登れない。そこで今西は学士山岳会（AACK）を、桑原武夫を再建委員長にして52年春には活動を再開させた。

その後、生物誌研究会は「カラコラム・ヒンズークシ学術探検」（1955年）を計画するなど、京大

からの学術探検計画の元締めとなる。また AACK はチョゴリザ初登頂 (1958 年) はじめ、日本からの海外登山のパイオニアとして活動する。

【フィールドワークの第一線を退く】

今西はカラコラム・ヒンズークシ学術探検に続いて、ゴリラ調査 (1958 年) にはじまるアフリカでの霊長類・人類学調査など、フィールドに出かけるのであるが、第一線のフィールドワーカーとしての役割を、伊谷たちに譲っていく。

その時期は、対象をウマからサルに移したころだった。一頭一頭のウマの追跡に執念を燃やしていた「動の今西」から、高崎山でサルについての報告を聞く「静の今西」への変身を、伊谷が描写している (注 26)。ニホンザルが餌づいたという報告も受ける。アフリカでも基地で読書したり思索にふける姿に伊谷たちは接する。今西はフィールドワークの第一線から、理論の構築へと向かった。

『人間以前の社会』(岩波書店、1951 年)、『人間』(毎日新聞社、1952 年)、それに続く「霊長類研究グループの立場—ニホンザル研究の跡づけ」(『自然』1957 年)、「ニホンザル研究の現状と課題—とくにアイデンティフィケーションの問題について」(『Primates』1957 年)、「人間家族の起源—プライマトロジーの立場から—」(『民族学研究』1961 年)などの著作は、伊谷たちにとって「私たちへのガイドラインの提示であり、将来への理論的展望であり、ときには警告であり、あるいは理論の再検討を内容とし」「明らかに先生は、御自身の役割を、新しい理論の構築者をもって任じておられたのである」(注 27)。

伊谷は「私は、今西先生の理論をフィールドで実証する道を選んだ」(注 28)と謙遜するのだが、今西のアイデンティフィケーション論にはくみせず、最後まで「折り合えなかった」。そして、「深い思考に基づいて立てられた理論に対して、先生はけっして安易な妥協はされなかったし、自説に対してはまことに頑固であった。あの頑固さは、自らの理論に対する真摯な態度の表明であり、教えるということはどういうことなのだとおっしゃっていたように思われてならない」(注 29)と記す。

このように、伊谷たち直接の弟子だけでなく、さまざまに今西の影響を受けたものにとっても、

「私たちはひたすら先生から野外研究の推進を勧められ、先生の広い視野と厳格な批判精神に接してきた」(注 30)といえよう。

【晩年に栄誉】

今西は、京都学派というべきフィールド科学の開拓者であり、一貫してリーダーをつとめたが、学内での昇進にはこだわらなかった。教授になったのは 57 歳である。1959 年、人文科学研究所に社会人類学研究部門が設けられ、講師から昇進した。続いて、62 年には理学部に自然人類学講座が設けられて教授に迎えられる。しかし、人文科学研究教授との併任にして理学部には助教授を二人採り (池田次郎と伊谷純一郎)、講座の体制を充実させた。そして、3 年後に京都大学で 63 歳停年を迎える。

その後、岡山大学教養部教授を 2 年間、岐阜大学学長を 67 年から 2 期 6 年間つとめた。72 年、文化功労者に選ばれる。受賞理由は「国内各地のニホンザルの生態を究明するとともに、数次にわたり、アフリカのチンパンジー、ゴリラの社会調査をして業績をあげ、霊長類学を高い水準に引上げた」。さらに 79 年、文化勲章を受けた。

【最後まで自然を求めて】

今西は、登山・探検史に残るような若い日の山行の後も、ひたすら山に登りつづけた。その登山は 13 歳の時に登った愛宕山に始まり、敗戦で京都に引き揚げてきたころに「日本五百山」の念願を立て、66 歳で達成する。その後、さらに日本の山の巡礼をつづけ、五百山から千山までは 10 年がかりだったが、千山から一千五百山までは 7 年強で達成するなど、登山への意欲は老年になっても衰えなかった。生涯に踏破した日本の山の数は 1552 に達した。生涯一登山家でもあった。

このように、今西は最後まで自然を求めつづけ、その思いは最期まで尽きることはなかった。そして、研究においてはフィールドワークを展開し、次々に新しい分野に挑んできた。そこから独自のセオリーをかんがえる創造的な学者であり、なによりも自らが得たデータに依って理論としたフィールドワーカーであった。

「千五百山」が示すように生涯を通じて山に登り続けたのは、自然との接触の感性を衰えさせないための、自らに課せたフィールドワークであった。

【「自然学」を提唱】

今西の学問をみていくと、そのフィールドを次々に換えて展開していったことがよくわかる。まず、学生時代には昆虫学を専攻。登山に熱中するとともに山岳地帯の万年雪や雪崩、高山植物の垂直分布など山岳研究を進める。カゲロウの分類や生態研究から幼虫で「すみわけ」を発見し、「種社会」論をかながえ、展開していく。戦争中にも学術探検をおこない、敗戦でモンゴルの草原から日本に帰ると、奈良県で農村調査も行う。九州の半野生馬、そしてニホンザルへとフィールドを展開する。若手研究者を率いて、わが国に霊長類学を育てた。さらにアフリカで繰り広げる類人猿・人類学調査を指導し、人類社会の起源について考察する。晩年には、独自の進化論、いわゆる今西進化論を提唱した。

そして、最晩年にいたって自らの学問を「自然学」と名付けて総括するのである。

その言葉を紹介しておこう。

「私は自然とはなにかという問題を、問いつづけてきたように思われる。それも何々学に代表されるような部分自然ではなく、つねに全体自然というものを、追い求めていたような気がする。私の求めていたものは自然学なのである。自然を理解しようとする学問であり、自然観の学問であると定義してもよいかもしれない（『自然学の提唱』）（注 31）

「長い過去をふりかえるとき、私が学問をつづけてきたことは、確かなのであるけれども、ではいったい何学を志向してきたのであろうか。若いころは昆虫学をやっていた。生態学もなにほどか齧っている。50 近くになってから人文科学にうつり、蒙古の遊牧民と触れ、アフリカにあっては、ゴリラやチンパンジーを観察した。70 を過ぎてから進化論を手がけ、いまそのしめくくりをしている。

私はこの長い一生のあいだになにをしてきた、そしてなにをのこしてゆくのか、ということ問いかえしてみると、終始一貫して、私は自然とはなにかという問題を、問いつづけてきたように思われる」（同）

「若くして生態学を学んだが成らず、中年に及んで山岳学を打ち立てようとするが、これも

成功したとはいえない。いま 80 歳になって私の提唱する自然学とはなんであるのか。それは自然を客観的に扱うことでなく、自然にたいして自己のうちに、自然の見方を確立することではなければならない」（『自然学の展開』）（注 32）

この、いわゆる「今西自然学」は、「自然を理解しようとする学問」である。そして、自然という豊かな対象を把握するには、＜全体自然＞というべきものを＜部分自然＞には切り離さずに、総体としてとらえるべきだという。自然の一部を自然科学的に解析するのではなく、まるごとの生きた自然を相手にせよ、と。

自然を客観的（自然科学的な意味で）に扱うのではなく、「自然に対して自己のうちに自然の見方を確立すること」であり、「今西自然学」はきわめて魅力的で、私には共感するところが大きい。

今日、自然科学が自然のとらえ方をますます細分化させているようだが、その反対に、大きくとらえようとする総合の方向はきわめて乏しいように見うけられる。そうではなく、自然という豊かなものをとらえるには、自然を切り刻まずに、生きたままつかむ方法がないのだろうか。そのためには、自然全体をとらえようとする学知、すなわち自然学というものが必要になってくるのではないか。

しかし、「今西自然学」そのままでは体系的なものにはなり難い。自然や自然観についてのさらなる知の蓄積が必要であろう。

私は「高所プロジェクト」において、自然を理解するための学問としての「自然学」を深めたいとかがえている。

注

（注 1）田中耕司編『「帝国」日本の学知 第 7 卷 実学としての科学技術』岩波書店 2006 年

（注 2）今西錦司『自然学の提唱』（『増補版今西錦司全集』第 13 卷、講談社、1993 年）

（注 3）梅棹忠夫「ひとつの時代のおわり—今西錦司追悼」『梅棹忠夫著作集』第 16 卷、中央公論社、1992 年

（注 4）『台湾博物学会報』vol.30, pp.263-267。以後、この「Mayflies from Japanese Torrents」（日

- 本溪流産カゲロウ類)は第10報まで続く。第2報から第9報までは『日本動物学彙報』Ann.Zoo.Jap.に載る。学位論文の第十報は京都帝国大学理学部紀要 Mem.Coll.Sci.Kyoto Imp.Univ.Ser.B.vol.14,pp.1-35。
- (注5)『地球』vol.11,pp.267-282。のち今西錦司『日本山岳研究』中央公論社、1969年に「剣沢の万年雪」と題して収録。
- (注6)今西錦司『日本山岳研究』自序(『増補版今西錦司全集』第8巻、講談社、1994)
- (注7)梅棹忠夫「ひとつの時代のおわり—今西錦司追悼」『梅棹忠夫著作集』第16巻、中央公論社、1992年)
- (注8)今西錦司編著『ボナベ島—生態学的研究』1975年、講談社
- (注9)今西錦司編『大興安嶺探検』毎日新聞社、1952年(朝日文庫、1991年)
- (注10)今西錦司他編『座談「今西錦司の世界」』平凡社、1975年
- (注11)梅棹忠夫「ひとつの時代のおわり—今西錦司追悼」『梅棹忠夫著作集』第16巻、中央公論社、1992年
- (注12)今西錦司「私の履歴書」『そこに山がある』(『増補版今西錦司全集』第10巻、講談社、1994年)
- (注13)伊谷純一郎「解題」(『増補版今西錦司全集』第6巻、講談社、1994年)
- (注14)伊谷純一郎「回想今西先生」『自然がほほ笑むとき』平凡社、1993年)
- (注15)今西錦司「F. E. クレメンツ—その学説の批判」『生物社会の論理』1971年(『増補版今西錦司全集』第4巻、講談社、1993)
- (注16)今西錦司「山の数をかぞえる」『山と探検』(『増補版今西錦司全集』第1巻、講談社、1993年)
- (注17)この後、ヒマラヤやカラコラム、そしてアフリカ行の合間をぬって国内での登山を続け、「日本五百山」を岐阜大学長時代の1968年9月15日、京都・北山の無名峰(951m)で達成する。
- (注18)伊谷純一郎「人類学の視点でサルを捉える」『自然が笑むとき』平凡社、1993年)
- (注19)伊谷純一郎「今西錦司先生とサル学事始め」『自然が笑むとき』平凡社、1993年)
- (注20)今西錦司『増補版今西錦司全集』第6巻、講談社、1994年
- (注21)伊谷純一郎『高崎山のサル』光文社、1954年
- (注22)伊谷純一郎「人類学の視点でサルを捉える」『自然が笑むとき』平凡社、1993年(注23)この第1次マナスル登山隊は7750mで撤退。登頂は1956年の第3次隊(横有恒隊長)になる。
- (注24)中尾佐助「探検と私—照葉樹林を認識するまで」『自然』6月号、中央公論社、1980年(『中尾佐助著作集』第3巻、北海道大学図書刊行会、2004年)
- (注25)佐々木高明「探検と学術調査」『中尾佐助著作集』第3巻、北海道大学図書刊行会、2004年)
- (注26)伊谷純一郎「人類学の視点でサルを捉える」『自然が笑むとき』平凡社、1993年
- (注27)同
- (注28)伊谷純一郎「下鴨界限そして家族起源論」『自然が笑むとき』平凡社、1993年
- (注29)伊谷純一郎「人類学の視点でサルを捉える」『自然が笑むとき』平凡社、1993年
- (注30)伊谷純一郎「回想今西先生」『自然が笑むとき』平凡社、1993年
- (注31)今西錦司『自然学の提唱』(『増補版今西錦司全集』第13巻、講談社、1993年)
- (注32)今西錦司『自然学の展開』1987(『増補版今西錦司全集』第13巻、講談社、1993年)